

【解題】「千草屋手控帳」

伏谷 聡

本史料「千草屋手控帳」は、千草屋の屋号を持つ宍粟市山崎町の平瀬家に所蔵された古文書のひとつである。内容はすでに、『ひょうご歴史研究室紀要』第三号で紹介されたが、ここに再録する。また、本解題は大部分を右書の説明に拠り適宜加筆訂正したことを断っておく。

この史料は、昭和四三年（一九六八）に郷土史家宇野正磯氏により翻刻された⁽¹⁾。宇野氏は本書刊行の一〇年ほど前にこの史料を平瀬家で発見した。平瀬家は現在でも四二〇点ほどの史料を保存している。宍粟市によって整理され、公刊されていないが目録も整備されている。内容は江戸時代から昭和ごろまでの主に家に関する記録が中心を成している。しかし、平瀬家が経営していた、たたら製鉄についての記録は本史料以外にはほとんどない。

史料の形態は横半帳で、表紙は絹布で表装され、史料原題は無く表紙見返しや本文冒頭にも表題を示す記載はない。史料名は宇野氏により命名された。平瀬家の「鉄山経営上の事柄を心覚えに記録したもの」の意でこう付けたという⁽²⁾。

史料は享保末年からほぼ時代順に宝暦初年まで書き継がれている。記載時期から見て平瀬家六代信古（のぶもと）の時

期とみられている。家伝によれば、平瀬家は江戸時代初期から後期までたたら製鉄を営んだ。もと宍粟市千種町に住んでいたが、初代平瀬清信が寛永一〇年（一六三三）ころに、息子保古（やすもと）とともに山崎町に移住して鉄山業で千草屋を始めたという。その後、大坂と京都に出店し経営を拡大した。

ちなみに、同家は舟運業の免許も受けていた。平瀬家は、鉄を生産し、しかも、みずから運輸手段を持つ商人であった。

その後、宝暦六年（一七五六）に平瀬家は、経営を維持できなかつたものか、鉄山を譲渡し、たたら製鉄から手を引く。本史料はこうした平瀬家鉄山業の後半期に書かれたものである。

史料の内容は、時代ごと内容別に記載されている。まず、江戸飛脚の出立日、ついで幕府による元文元年（一七三六）の銀貨改鑄に伴い、輸送費と鉄山稼に関わる賃金を新たに換算したリスト、道具製作・修理費用、たたらおよび砂鉄採取のコスト計算、はたまた鉄山業に関わる担当役人と思われる武士の名前と謝礼内容までがこの史料には書かれた。

しかし、この記録は鉄山経営のマニュアルではない。平瀬家の判断により、必要だと思われた鉄山に関する事項を書き留めている。

たとえば項目5のたたら製鉄従事者の給料について触れたところでは、製鉄全体の監督である「村下」の給金については記述がなく、精錬作業のリーダーである大工の給金から始まる。すべての作業従事者について記述されているものではない。また、項目7の「たたら製鉄道具代」でも、記述順は作業種別に書いてあるわけではないようで、なにより道具名の地域性によるものか、個別の道具がどのようなものかわかりにくいのである。

右の点からも、史料は千草屋が経営上必要なメモとして書き残したので、千草鉄の技術を簡潔に説明したものではない。よって、記述内容は一般的なたたら製鉄技術と比較検討する必要があるということは留意していただきたい。ただ、千草鉄の技術に関する史料は、ほかに宍粟市域では見当たらないから、その点では貴重である。

なお、史料には項目名や表題などが付されていない。この点が史料を理解しにくくしているのだが、本稿では、理解の助けとなるよう、内容ごとに番号を振って細目次に記載した。史料を読んでみて興味深いのは、項目第一八の宍粟郡で採取される砂鉄の量である。中国地方のたたら製鉄のマニユアルとして著名な「鉄山必用記事」には、中国山地のたたら製鉄に必要な砂鉄量は、砂鉄採取の方法である鉄穴（かんな）流しにより掘り出した砂鉄を含む土一升に対して砂鉄は三分

ほど採取されれば十分とされた。本史料の鍵掛山⁽³⁾の例で見ると、採取された砂鉄の量は、土一升に対して一匁九分であった。宍粟郡では、「鉄山必用記事」に記載された必要砂鉄量の六倍強採れたことがわかるのである。

宍粟郡から産出されるいわゆる「千草鉄」は刀剣の材料となる良質の鋼が産出されることで有名だったから、この産業が豊かな砂鉄に支えられた産業だったということができよう。ただし千草鉄はまた古代以来の製鉄の源流のひとつと尊敬を受けながら、近世においては他の中国山地の製鉄業を圧倒する鉄を生み出す産地にはならなかったのである。千草鉄が鉄の大産地として成長しなかった理由や、また生産の実態を考える上でも、ここに紹介する史料が貴重なものであることは理解されよう。

【注】

(1) 宇野正磯編『近世千草鉄山史料』中（一九六八）に収録。

(2) 前掲注（1）書。

(3) 「かんかけやま」と読む。宍粟市波賀町原に所在。地名が宍粟市内の場合は市名を省略した。